

백가면과 황금굴

2018

by 김내성

This book is published with the support of the Literature Translation Institute  
of Korea (LTI Korea).

目次

白仮面

5

黄金窟

137

訳者あとがき

226

白  
仮  
面

## 主要登場人物

白しろ仮か面めん…………… 正体不明の怪盗

劉ユ不ブ亂ラン…………… 探偵小説家だが探偵としても名高い

姜カン永ヨシ済ゼ…………… 発明家として世界に知られる工学博士

水ス吉ギル少年…………… 姜博士の息子

大テ準ジュン少年…………… 水吉の親友

任イ警ム部…………… 白仮面を追跡する捜査責任者

朴パク之チ龍ヨン…………… 大準の父。消息不明

一 はじまり

愛する数百万の少年諸君！ いまからみなさんに読みだしたらやめられなくなるような、おもしろ  
おかしい物語を書きついでいこうと思います。

みなさんはかなしくて涙がこぼれ出る、そんなかわいそうでせつなくなるような物語よりも、ぞつ  
とするほどこわく、手に汗をにぎってハラハラドキドキしながらも読まずにはいられない、そんな物  
語のほうをよりいっそうこのまれることと思ひ、つぎのような興味をかきたててやまないお話しをは  
じめてまいります。

それは世界各国の大都会とよばれる街にかならずあらわれては国の宝物をぬすみ、邪魔立てする者  
はようしやなく殺してしまうというおそるべき白仮面の物語なのです。

白仮面は全身にヒラヒラゆるるながくて白いマントをはおり、見るのもおぞましい髑髏どくろをえがいた、  
やはり白い仮面をかぶっています。

そんなぐあいに全身を白い衣装でおおっているため、いったい何者なのか、白仮面の素顔を見た者  
はだれひとりしていません。インド人だという人もいれば、中国人だという人もいるし、ドイツ人  
ともいわれ、米国人だとみる人もいるのですが、どの人の考えがただしいのか、まるきり確かめるす  
べがないのです。

白仮面は自分が手にいれると決めたものはなんであれ、うばうことのできる、じつにおそろべき能力をもっており、そして、さらに何日の何時になにをうばっていくのかをかならず手紙や電報で相手に予告します。

それで、白仮面からそういった大胆な、おそろしい手紙を受けとった人は齒の根をガタガタふるわせ、警官とか名高い探偵とかにたすけをもとめ、やしほ邸をぐるりと取りかこんでもらいながら白仮面が来るのを待ちうけるのです。

ところが、いつの間にもどうやってしのびこんだものか、予告時間になれば、白仮面がうばっていくと通知してきたものは、あとかたもなく消えてしまいます。天にのぼっていったのか、地の底へはいっていったのか、なんとも不思議でなりません。

新聞にはほぼ連日、白仮面の関係するおそろしい事件の記事が書きたてられています。

世界中が白仮面のうわざでもちきりです。

「白仮面が英国のロンドンにもあらわる！」

「今度は米国のニューヨークにもあらわる！」

「フランスのパリにもあらわる！」

世界中の新聞で見出しの活字がおどっています。そして白仮面があらわれると、その国でもっとも値打ちのある貴重な物品がうばわれてしまうのです。金銀宝物だの、国の機密書類だの……。

こうして、おもに西欧で世間の注目の的になっていた白仮面が、東洋にもやってくるといううわざがひろまってきました。そうして、一か月ほど前に白仮面はついに中国の国際都市、上海にやってきましたといわれるにいたったのですから、それ以上におそろしいことがあるでしょうか。

「白仮面が朝鮮にあらわれたらどうしよう？」

「たいへんだぞ！」

「どうすりゃいいんだ！」

人々が何人か集まると決まって恐怖におのきながら、白仮面の話が口をついて出るのでした。

すると、ちょうど二週間前に朝鮮で一番大きな新聞社あてに白仮面から一通の封書がとどいたのです。その内容は、つぎのようなみじかい文面でした。

一週間以内に京城けいじょうへ行くつもりだから、そのつもりで。——白仮面——

とうとう、おそるべき白仮面が京城までやってくるというのです。あまりのことに人々はおちつきをなくし、氣力がなえてしまったかのようです。

あんなにもにぎやかだった鍾路チヨンノの街角は日がおちると、人どおりはブツツリとだえ、子どもたちはふとんの中でブルブルふるえるばかりです。

一日がすぎ、二日がすぎ、いつしか一週間がすぎていきました。

「白仮面はいつあらわれるんだろう？ はたして白仮面は京城に来るのか、来ないのか？」

そんなふうになんかこわがりながらも、その一方では白仮面が来るのを待ちかねているかのようにおしゃべりするのです。

ああ、ついに白仮面が京城にやってきたといううわさが、またたく間に京城の街中にひろがっていききました。

安国洞アノクドに住む、ある婦人が夜中に厠かわやへ行こうとしたところ、黒い塀へいの向こうを頭のとっぺんから足  
のつま先まで白いマントで身をかくしたあやしい人影がスーッととおりすぎていくのを見たといいま  
す。髑髏どくろの仮面をかぶり、白馬にまたがっていたそうです。

その婦人は驚愕のあまり、その場で気をうしなってしまうたとも。  
それからというもの、夜中にひづめの音さえ聞こえてくれば、

「白仮面だろうか？」

と、人々はおぞ気をふるうのでした。

こうして京城市内にあるすべての警察署は白仮面の犯行を未然にふせぐため、白仮面を拘束しよう  
とあの手この手と作戦をねるのですが、いっこうに成果はあがりません。

そんな最中さなか、ある日の夜、不意に白仮面があらわれ、工学博士姜永濟カンヨンジユ氏を拉致らちしていったのです。

この一編の物語は姜博士の息子姜水吉カンスイキル少年が、友人朴大準パクテジョン少年と探偵小説家劉不亂リュウボラン氏の力をかりて、  
白仮面の手から父を救いだそうとするところからはじまります。



## 二 姜博士

水吉少年スギルの父、姜博士は朝鮮でも名高い發明家で、余人をもって替えがたい有能な学者です。

六十に手がとどく姜博士は鼻の下と顎あごに白いひげがながくのびていて声に張りがあり、そのとりのよい声を聞く者におのずと威厳を感じさせる力をもっています。

高齡の親のもとで生まれた水吉少年をことのほかいとおしみ、

「偉大な人間になるんだぞ。自分がただしと思つたら、おそれず勇敢にたたかうのだ。そうすれば、おまえはわれらがほこれるりっぱな人間になれる」

姜博士はいつも水吉にそういつて聞かせるのでした。

水吉には大準テジユンという普通学校（朝鮮人兒童を対象とした初等教育機関）五年になる親友がいます。水吉は大準をすごく気に入っていたし、大準にとつても水吉は大の仲よしでした。

このふたりの少年は、朝にはともに学校へ行き、夕べにはともに学校から帰ってくるまでいっしょに遊んだり、勉強したりします。

しかし、大準は水吉の家の正門わきにある離れはなでくらすほどにまずつく、そしてまた大準の父は十年前、大準が四歳のときに商用で渡航中、インド洋のセイロン島付近でおそろしい海賊と出くわし、死んでいるのか生きているのか、いまなお消息が知れないのです。

それで、姜博士は大準ら母子をたいそう気の毒に思い、たとえ自宅の離れとはいえ、清潔な部屋に住ませ、息子とわけへだてなくかわいがり、学校へもかよわせました。

ところが、姜博士はおそろしい白仮面に突然つれさられてしまったのです。どうすればよいのでしょうか？

姜博士は一年のうち大半は家にいず、黄海からほど近い高台に研究所をもうけて、そこである種の機械装置を發明しようとしていました。

それがいかなる機能をもった發明品なのか、その秘密を知る者は世界ひろしといえども一人もいないでしょう。それはとてつもなくおそろるべき力をもった、おどろくほどすぐれた機械装置だということです。

その發明品がいかに独創的で、どれほど偉大な力をひめているのか、みなさんはこの白仮面の物語を最後までお読みになると、だれよりもよく知ることができるでしょう。

それはさておくとして、姜博士はどんなふうにして白仮面につれさられていったのか、いまからその事件の経緯について話してみることにはしよう。

姜博士は黄海沿岸の研究所で研究をつづけていたのですが、海辺でのひとり暮らしがさびしくもあり、愛する水吉と大準の顔を見ることもかね、しばらくのあいだ、世の人々のうごきをながめてみようと京城にもどり、姜博士が嘉会洞の自宅へ帰ってきたのは、いまからちょうど一週間前のことでした。水吉少年は母のそばでねむろうともせず、父の帰りを待ちこがれながら、

「かあさん、とうさんが帰ってきたら、なにを買ってもらおうつもりなの？　ぼくは見世物につれていってもらおうつもりなんだ」

そういうと母は、

「見世物？ 活動写真に行きたいの？」  
と、ききました。

「ちがうよ。活動写真なんかに行ったら学校でしかられるんだから。サーカスにつれていってもら  
んだ」

「サーカス？ どこに来たの？」

「<sup>チェンチェンダン</sup>奨忠壇公園に来てるんだって。すごいんだってね。奇術もやるし、綱わたり、馬乗り、空中飛行  
なんかもあるんだ。それにこんどやって来たサーカス団は世界一ともいわれていて、団員も世界各国  
から集めてるんだって。アフリカの人もいるんだよ。とうさんが帰ってきたら、いっしょに行きたい  
んだけど。かあさんは行かないの？」

「やめておくれ。おまえが行っておいで」

あくる日、父が帰ってきました。父が帰るなり、水吉はサーカスにつれて行ってほしいとせがみま  
す。父は白い顎ひげをなでおろしながら、

「そんなに行きたいのなら、今夜行こう！」

と、あっさり承知してくれたものだから、水吉少年の喜びはいかばかりであったでしょうか。

はやい夕食をすませて姜博士は水吉、大準のふたりの少年をつれて<sup>チェンチェンダン</sup>奨忠壇公園に来たサーカスに  
行きました。水吉はどこへ出かけるにしろ自分が飼っている鳩をつれていき、大準は犬をつれていく  
のがお決まりです。

こうして、ふたりの少年は心をおどらせ、それぞれハトと犬を胸にだきながら車に乗ってサーカス

見物に出かけたのです。

サーカスは少年を夢中にさせるほどおもしろいものでした。わけてもブランコから別のブランコへと空中を飛んで乗りうつる空中飛行にはハラハラしながらも目をうばわれてしまいます。ブランコに乗っていた人は胸毛をもじゃもじゃはやした西洋人だそうです。さらにもうひとつ目がくぎづけになったのは、中国服を着た人によるナイフなげでした。それは板の前に人を立たせておいて、その板とはなれて向かいあう位置に立った人が板の前に立った人を目がけてするどいナイフを何本もなげるのです。ナイフは人にあたりそうなのに人のからだにはあたることなく、肩の上、わきの下へとからだすれすれの位置にある板上にストーンストーンと突きささっていきます。ナイフをなげるたびに見物する人々は自分の胸にナイフが突きささるような気がしてゾクツとするのでした。

サーカス小屋を出たときには、すでに午前零時もすぎた深夜です。

そのとき水吉は、

(白仮面があらわれたらどうしよう?)

なぜか胸がドキドキしてならないのです。

それでも、父がすぐそばにいるし大準もいるんだから、と不安を面に出さないようにしていたのです。

夜はいつそうふけてゆき、空は墨汁をそそいだように真っ暗な闇におおわれています。

針先ほどの星だけが空のかなたでまたたいていたのですが、いまはそれさえも見えません。

いま水吉親子と大準を乗せた車は、チャンチュンジン 奨忠壇公園から嘉會洞カフエドンに向かって走っています。奨忠壇公園の前には、なおも帰りの見物客がなごりをおしんでいたのですが、車が東大門トンナムンをすぎ、鍾路チョンノへつうじる

道路へさしかかったころには人影ひとつなく、くらい街角は死んだように寝静まっています。

「とうさん、とうさんは白仮面がこわくないの？」

だしぬけに水吉がききました。

「水吉はこわくなってきたのかな？」

姜博士は笑顔を向けます。

「ちがうよ。こわくなんかないんだけど」

水吉はつよがつてみせました。そのとき、よこにすわっていた大準は袖をまくりあげながら、

「こわくなんかあるもんか！ 白仮面が出てくりや、ぼくがつかまえてやる！」

そういつて、コムドウン【犬の名前】の頭を二、三度なでてやったのです。

ああ、ちょうどそのときでした。車が鍾路十字路から安国洞アノクドへ曲がろうとしたその瞬間、

「アッ！」

とさげんで、運転手が急ブレーキをかけるではありませんか。

なっ、なんだいありや！ 車の前方に前脚をたかだかと宙にうかせ、歯をむき出しにしていなく  
白馬を！ そして、うす気味悪い髑髏どくろの仮面をかぶった馬上の白仮面を！

姜博士はとっさに水吉と大準をだきしめたのですが、電光石火の早わざで姜博士の胸に拳銃をねら  
いさだめたまま姜博士を馬に乗せ、暗闇の中を三清洞サキチヨウドウ方面へと走りさってしまいました。

運転手は全身をブルブルふるわせ、白仮面のうしろ姿をぼうぜんと見やるばかりです。

しかし水吉と大準のふたりは勇敢にも声を張りあげました。

「運転手さん！ あの白仮面のあとを追いかけてください！」

「そんなむちゃな！ 追いかけたりなんかできませんや！」

最初はそういつてしりごみしていた運転手も、お金ならいくらでも出すといわれ、ついには車をうごかし、白仮面のあとを追いかけるはじめました。

## 訳者あとがき

韓国における少年探偵小説の歴史は韓国の推理小説研究家朴光奎パククワンギョ氏の調べ（「植民地時代の児童推理小説」季刊ミス터리51号、二〇一六年三月）によりますと、日本統治時代の一九二〇年代に始まり、一九四五年の終戦までに二十数編の作品が新聞や雑誌に掲載されたことが確認されています。しかしながら、なかには創作なのか翻案なのか不分明な作品もあり、個々の作品を評価するには情報が不足しているようです。したがって現時点では、「朝鮮における児童文学の先駆者」といわれる方定煥（パン・ジョンファン）が一九二三年に創刊した児童雑誌『オリニ』の一九二五年一月号から連載の始まった「妹をさがせ」が少年探偵小説の嚆矢といえるでしょう。この作品は方定煥が北極星の筆名で発表したもので、その後も同じ筆名でたてつづけに「七七団の秘密」、「少年三台星」、「少年四天王」という題名の少年探偵小説を『オリニ』誌上に連載しています。なかでも「七七団の秘密」は完成度が高く、現代の読者にも人気があり、いまなお再版がつづいているほど息の長い作品です。「七七団の秘密」は一九二六年四月号から一九二七年十一月号にかけて不定期連載された一種の冒険小説。朝鮮人としての民族精神を鼓舞しようとする意図の窺える作品なのですが、家族のために死をも恐れず、勇敢に行動する少年の姿に時代を超えて読者を惹きこむ力があると思います。一般に、この作品は韓国が日本の植民地であった時期のうち一九二〇年代における少年探偵小説の代表作とみなされて

〔著者〕

金来成（キム・ネソン）

1909年、平安南道大同郡生まれ。35年、早稲田大学在学中に探偵雑誌『ぶろふいる』でデビュー。朝鮮に戻ってから、戦前は探偵作家、戦後は大衆文学作家として活躍した。主な作品に、『魔人』、『白蛇図』、『真珠塔』、『人生画報』、『青春劇場』などがある。『京郷新聞』に長編小説『失楽園の星』連載中の57年2月、脳溢血のため死去。

〔訳者〕

祖田律男（そだ・りつお）

1951年、兵庫県神戸市生まれ。図書館司書を経て韓国語翻訳家となる。訳書に『コリアン・ミステリ 韓国推理小説傑作選』（パベル・プレス）、『最後の証人』、『魔人』、『金来成探偵小説選』（いずれも論創社）などがある。

しろかめん  
白仮面

——論創海外ミステリ 224

---

2018年12月25日 初版第1刷印刷

2018年12月30日 初版第1刷発行

著者 金来成

訳者 祖田律男

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1766-8  
落丁・乱丁本はお取り替えいたします